

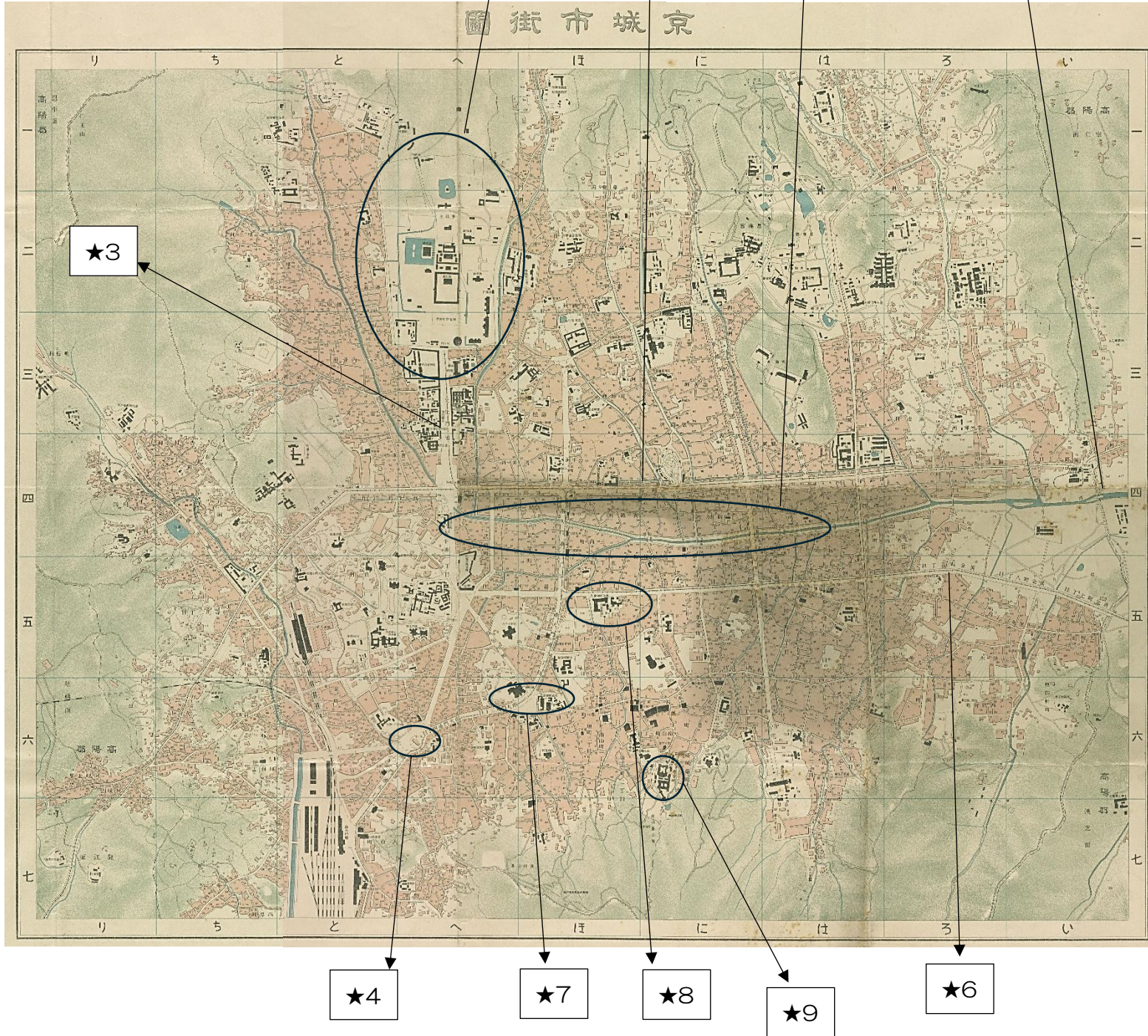
授業で使える当館所蔵地図

NO. 97『京城市街図』

作成年：不明

サイズ：65×96

作者：朝鮮総督府（著作兼発行）



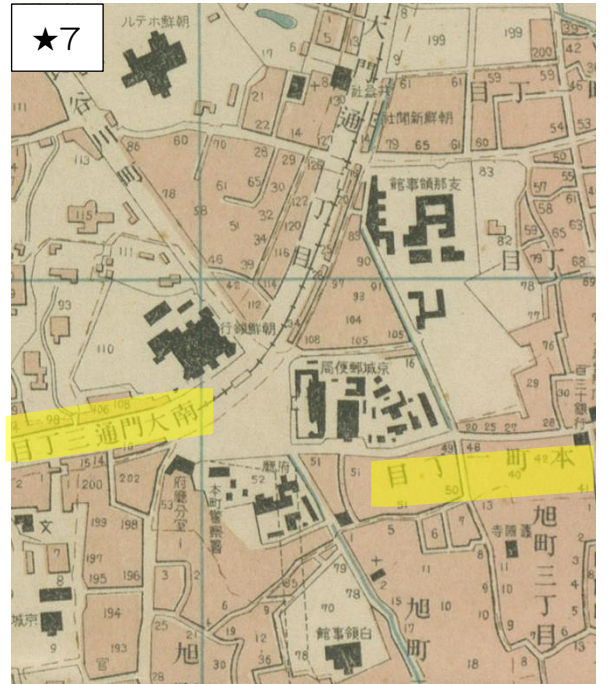
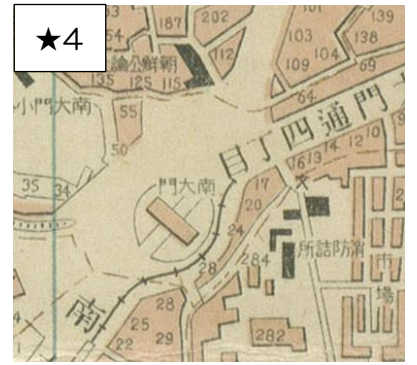
【解説】

1910年、韓国併合条約により韓国は日本の植民地となった。名称は「大韓帝国」から「朝鮮」に、「漢城」は「京城」と改められた。統治にあたったのは天皇直属の朝鮮総督府である。1945年に日本が敗戦するまでの35年間、統治の基調は「同化」であった。本資料は朝鮮総督府によって作成された「京城市街図」である。日本による植民地支配の京城の市街地の様子や総督府や京城府庁が行った都市計画の経過をみることができる。朝鮮植民地支配の過程や統治の方針などを読み取ることができる貴重な資料と考えられる。

★1~7 都市の構造

京城は漢江の北側、漢江下流の右岸に位置する盆地地形に位置している。地図でも周囲を山に囲まれていることが確認できる。1359年に朝鮮王朝の初代王・李成桂が創建した景福宮(★1)は盆地の北側に位置している。京城には景福宮以外にも昌徳宮、徳壽宮、宗廟などがあり、京城域中心部を流れる清溪川(★2)の北側が朝鮮王国の中心地であったと考えられる。京城内には大きな通りがいくつかみられる。一つは景福宮から南へ伸びている光化門通(★3)である。光化門通は鐘路通を過ぎると太平通と呼称が変わり、さらに南西へ伸びる。南大門(★4)にぶつかるとその先は南大門通となりさらに南下すると南大門駅へと出る。景福宮にはこののち朝鮮総督府が置かれるため、ここが総督府につながるメインストリートだったのである。南北に伸びる通りは光化門通・太平通のほかに2本ある。これらの通りと直行する2本の通りがある。一つが京城における朝鮮人の中心地である鐘路通(★5)、もう一つが黄金町通(★6)である。これらの通りによって京城の街は碁盤目状に区切られている。黄金「町」通という名称からわかる通り、これは植民地支配が始まってから敷設または改修された道路であり、この碁盤目状の構造となっているのは日本の植民地政策の影響である。

交差点には大きな広場がいくつかみられるが、経済的な中心となっているのは南大門通と本町通の交差点(★7)である。「京城郵便局」「朝鮮銀行」「朝鮮ホテル」「支那領事館」「白(ベルギー)領事館」などがみられる。



★8 東洋拓殖会社

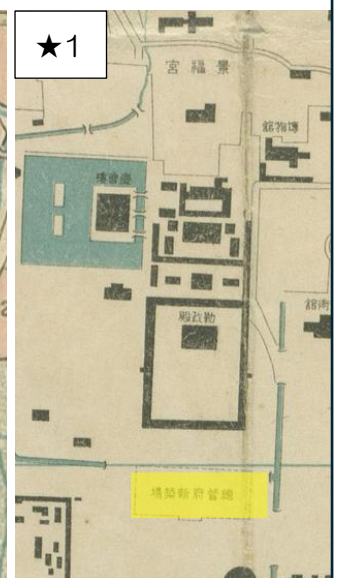
南大門通と黄金町通の交差点から少し東に入ると東洋拓殖会社(★8)がある。東洋拓殖会社は1908年、韓国の資源開発・殖産振興を目的に日韓両国政府によって設立された国策会社である。土地調査事業による収公地の払い下げを受け、朝鮮最大の土地所有者として営農・灌漑・金融を行った。

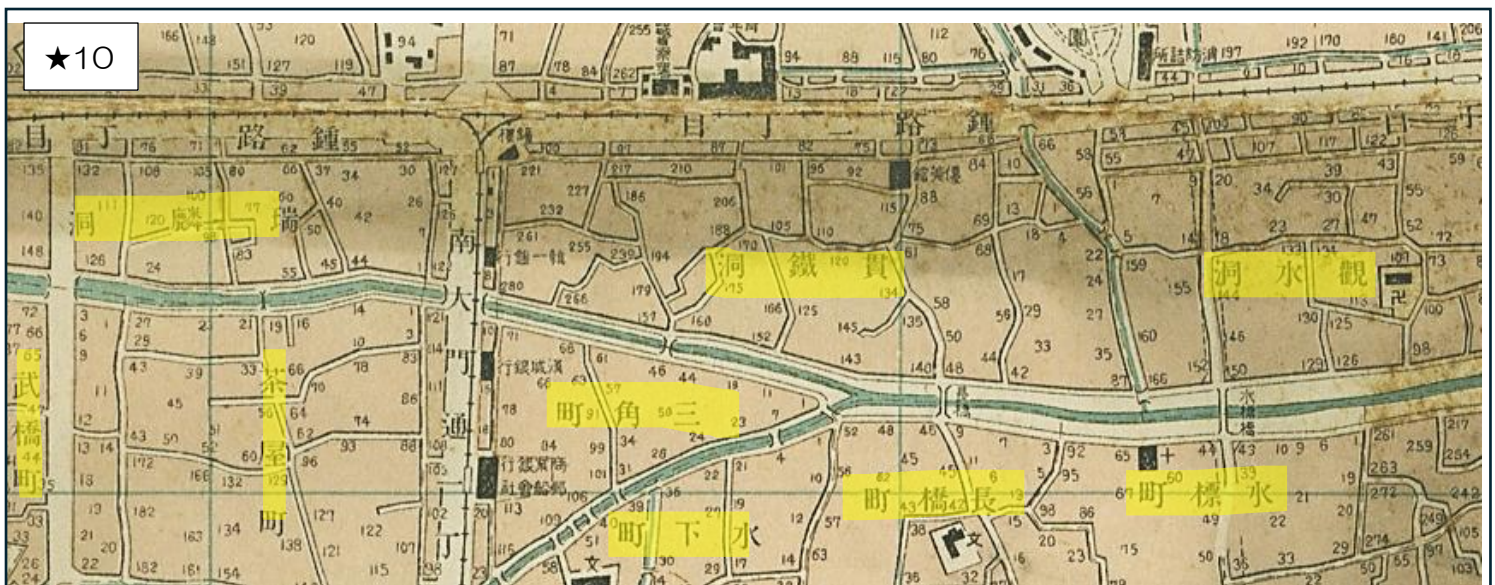


★9 朝鮮総督府

本町通の南側、盆地の縁に総督府の文字がみえる。これが韓国併合後の朝鮮統治機関である朝鮮総督府(★9)である。

天皇に直属し、軍事・行政の一切を統轄した。朝鮮総督府といえば景福宮の前に衝立のように建てられ、「日帝三十六年」の象徴として韓国の人たちの心を逆なでにしてきた建物である。しかし、この地図ではその場所に総督府はない。景福宮(★1)には「総督府新築場」の文字がある。1926年に総督府庁舎が建設・移転した。この地図は発行年が不明であるが、総督府の位置から1926年までに発行されたことがわかる。





★10 日本人と朝鮮人の居住地の境界

京城の街のほぼ中央を流れるのは清溪川(②)である。よく見ると、そこを境に「町」の名称が異なる。北は瑞麟「洞」、貫鐵「洞」、観水「洞」、南は武橋「町」、茶屋「町」、三角「町」と記載されている(⑩)。

韓国併合以前から、朝鮮には多くの日本人が渡っていた。多くは日本で社会的地位が低く、経済力がない、朝鮮で一山あてようという「冒険的渡韓者」と表現できる人々であった。彼らは京城域のはずれ、本町通に拠点をもった。そのため本町通がある清溪川の南に日本人が多く居住するようになり「町」が形成され、景福宮などがある清溪川の北に朝鮮人が居住する「洞」が広がるようになったと考えられる。朝鮮総督府が元々この地図の場所にあるのも、日本人が多く居住したためと考えられる。しかし、併合間もない1911年5月に総督府は景福宮全体の管理権を李王職から譲り受けている。早い段階から総督府は景福宮に庁舎建築を構想していたと考えられる。本町付近から景福宮に総督府が移る意図としては「京城における伝統的中心部＝朝鮮街」の整備と再編があげられる。日本は京城を日本人の住みよい街ではなく、「植民地の都市」にしようとしたのだろう。

【利用の例】

- 日本の朝鮮支配のあり方を理解できる。
(高等学校日本史探究「日清・日露戦争と国際関係」)
→京城の施設の位置関係から、日本人の根拠地がどこにあったのか京城の構造を説明することができる
→景福宮内に朝鮮総督府がなぜおかれたのか、街の構造からその理由を考えることができる
- 日本の植民地支配について考えることができる
(高等学校歴史総合「日露戦争が与えた影響」)
→碁盤目状の「植民地都市」をなぜつくろうとしたのか、他国の植民地都市と関連付ける
- 朝鮮に住む日本人の暮らしを考えることができる
→日本人の拠点が京城内のどのような場所にあったのかを読み取らせる
外地に住む日本人がどのような暮らしをしていたのか考える

【参考文献】

- 大村次郷『遺跡が語るアジア』中公新書(2004)
- 廉馥圭・著 橋本妹里・訳『ソウルの起源 京城の誕生 1910～1945 植民地統治下の都市計画』明石書店(2020)